

受賞者からのコメント

小生のどこが「ベストティーチャー」にあたるのか甚だ不思議でならないが、頂けるものはありがたく頂戴せよ、という爺様の教えに従い慎んで拝受することに致しました。

●授業を行うにあたって工夫していること

大学のレーゾンデートルの一つは「考える」ことの自由が担保されていることである。また将来、医療保健職を目指す学生にとっては、どの道に進もうとも「考え続ける」ことは必須の能力である。

従って私は、学生さんに対峙する時にはいつも「考える」ことを促す。否、はじめから促すことは難しいので、そのきっかけくらいは提供しようと考え講義にあたっている。だからあまり教えない。記憶すべきこと、学びを進めるために鍵になる専門用語とその関連は最低限の提示こそするが、その詳細は恐らく教えていない。一方で、学生に行間は学習することを要求している。本学に着任して以来、今の学生さんの気質は「すっきり理解ことを好む」「すぐに（紛れの無い）解答を欲する」傾向が強いことを感じた。これらの一部はいわゆる理系学生に特有のものかもしれないが、私の担当している講義が社会医療、社会科学寄りの講義が多くその欲求を即時的に満たすことが困難であるし、将来、臨床や社会で直面することは数学的、理学的対処だけではもちろん解決困難である。これらことが、自身の講義スタイルを形成した理由の一つとなっているのは間違いない。

具体的には、用語などの振り返りには「(抜打ち)小テスト」の実施、考えることのトレーニングとして「グループワーク」を多用している。また、「集中してなさそうな」学生を狙いうち指名をしたりもする（自分が学生なら嫌な教員である）。以上のように、授業にあたって特別に（俗物的に）工夫していることはないというのが正直なところである。

冒頭で「教えない」とは記したが、講義全般を通して一つだけ拘っているのは以下の事である。理学療法に関係が深い運動、動作、行為のどのレベルも研究は進んでいるが、依然として「ブラックボックス」は存在する。そのブラックボックスを受容しつつ考えを進めること（ヒューリスティクス的な思考）の意味を、大切さを、担当している講義全体を通じて理解してもらえたらならば、またその背景には必ず「学（論と言ってもいい）」があることに気がついてもらえれば、能動的な学習態度の形成の一助になるだろうという信念のもとに（今のところは）講義している次第である。

● 学生への要望・アドバイス等

現在、本学に在籍していることの意味を今一度考えて欲しいと思います、初心忘るべからず、です。また少し不遜ですが、社会情勢が混とんとしつつある中でも、皆さんは大変恵まれた存在であることを大いに自覚してください。その上で、10年後、20年後、30年後、・・・に自分はどうなりたいかという夢・それに向けたロードマップを出来るだけ具体的に作成してください。夢は大きければ大きいほど良いと思います。あとはそれに従って実行あるのみです。（不出来だったOBより）